

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：11601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720170

研究課題名(和文)ドイツ啓蒙主義とロマン主義の関係

研究課題名(英文)The Relation between Enlightenment and Romanticism in Germany

研究代表者

高橋 優 (Takahashi, Yu)

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：40557617

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、従来啓蒙主義へのアンチテーゼとみなされていたドイツ・ロマン主義を啓蒙主義的諸学問との関係で捉え直し、ドイツ・ロマン主義が啓蒙主義的学問を踏まえ、それを乗り越えて行く運動であることを明らかにする試みである。当該研究では主に、ノヴァーリス『ハインリヒ・フォン・オフターディングゲン』、フリードリヒ・シュレーゲル『ルツインデ』、クレメンス・ブレンターノ『ゴドヴィ』、およびハインリヒ・フォン・クライストの短編を分析し、ロマン主義的「新しい神話」運動の変遷の過程を啓蒙主義的感覚論、歴史哲学、自然科学の文脈から捉え直した。

研究成果の概要(英文)：This Research is an attempt to reveal that the German Romanticism is not a Counter-movement against the Enlightenment, but a movement that integrates divers sciences and thoughts of the Enlightenment. I analysed mainly the works of Novalis, Friedrich Schlegel, Clemens Brentano and Heinrich von Kleist and through the analyse I reveal that the "New Mythologie"-Project of the German Romanticism is based on natural and human sciences of the Enlightenment.

研究分野：近代ドイツ文学

キーワード：ドイツ・ロマン主義 ドイツ啓蒙主義

1. 研究開始当初の背景

ロマン主義を啓蒙主義に対するアンチテーゼとみなす立場は、ハインリヒ・ハイネが「ドイツの市民的解放の障害となった後退的・中世的・カトリック的なドイツ・ロマン派」を批判して以降『ロマン派』(1836)以降、脈々と受け継がれている。その後のロマン主義文学研究においても、啓蒙主義的進歩思想と、ロマン主義的懐古趣味は相反するものとして捉えられてきた。

だが1960年代以降、初期ロマン主義文学の歴史批判全集の編纂が進むにつれ、次第にロマン主義者たちが啓蒙主義の哲学や自然科学に積極的に関わっていた事が明らかになり、ロマン主義と啓蒙主義を相関関係において捉えようとする動きが生まれて来た。ロマン主義者たちが計画した「百科全書」に注目したヘルムート・シャンツェの『ロマン主義と啓蒙主義』(1966)は、ロマン主義と啓蒙主義の思想的関係を追求した先駆的研究であると言える。その後、宗教的側面から両者を論じたL.シュトッキングーは『ロマン主義者の啓蒙主義に対する葛藤』(1994)により、ロマン主義者のキリスト教への回帰は宗教を否定した啓蒙主義への反発によるものではなく、啓蒙主義的進歩思想とキリスト教的歴史観を折衷させる試みであったことを明らかにした。さらに21世紀に入ると、ユルゲン・ダイバー(2001)や、ラルフ・リートケ(2003)により、ロマン主義者が当時最新鋭の科学技術に関わり、思想的にも影響を受けていたことが明示された。

以上のように、ロマン主義と啓蒙主義を対立関係ではなく相関関係として捉える研究は徐々に増えているが、研究の主流になったとは言いがたい。現代におけるロマン主義研究の第一人者の一人であるリュディガー・ザフランスキーは『ロマン派：ドイツ的事件』(2007)において、ドイツ・ロマン主義は純粋に文学的な運動であり、その他の時流とは関わりを持たず、啓蒙主義的進歩思想とは正反対に位置するという立場が改めて提唱された。このように、ロマン主義と啓蒙主義をアンチテーゼと捉える研究は今なお根強く残っている。また、国内においては、個別の作家研究はあるものの、ロマン主義の包括的研究は未だ行われていないと言える。ドイツ・ロマン主義は、現代思想にも多大な影響を与えている大変重要なムーブメントであり、包括的研究、及び思想史的位置づけの試みは必要不可欠であると考えたことが研究の動機である。

2. 研究の目的

ロマン主義の文学活動は従来、理性絶対の啓蒙主義に対するアンチテーゼであると理解されていた。しかしロマン主義者たちは、哲学、自然科学、文献学、歴史学の分野で啓蒙主義者たちが行った手法で学問・研究に取り組んでおり、彼らを単純に反啓蒙主義と定義することは不可能である。この研究は、まず第一に初期ロマン主義者ノヴァーリスおよびフリードリヒ・シュレーゲルの啓蒙主義に対する態度を調査する。扱う作品は主に、ノヴァーリス『信仰と愛』、『ヨーロッパ』、『ハインリヒ・フォン・オプターディングゲン』、『シュレーゲル』、『ルツィンデ』、『哲学的修業時代』さらにクレメンス・プレントナーノ及びハインリヒ・フォン・クライストなどの後期ロマン主義者と啓蒙主義の関係を解明する。後期ロマン主義の作品では、主にプレントナーノ『ゴドヴィ』、『クライスト』、『聖ドミンゴ島の婚約』、『マリオネット劇場』、『アヒム・フォン・アルニム』、『エジプトのイザベラ』である。ロマン主義運動が啓蒙主義からの断絶ではなく、啓蒙主義を踏襲し、凌駕する運動であるということを明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

はじめに、ノヴァーリスの政治的著作『信仰と愛』及び『ヨーロッパ』の分析を行い、啓蒙主義的歴史観及び政治思想がロマン派にどのように受容されたのかを明らかにした。さらに『ハインリヒ・フォン・オプターディングゲン』を中心とするノヴァーリスの文学作品を詳細に研究することにより、思想がどのような形で文学に昇華されたのかを解明した。続けて、フリードリヒ・シュレーゲル『ルツィンデ』について、啓蒙主義的感覚論を手掛かりに分析を行った。初期ロマン派の研究が一定の成果を収めた後は、後期ロマン主義における啓蒙主義受容の研究に取り組んだ。具体的には、プレントナーノ『ゴドヴィ』における哲学のパロディを分析する事、そして、クライスト『マリオネット芝居について』の歴史意識を啓蒙主義との比較的観点から明らかにする事を目的に研究を進めた。

4 . 研究成果

平成 23 年度は、主にノヴァーリスの『信仰と愛』や『ヨーロッパ』などの政治的著作に関する研究を行った。ノヴァーリスが執筆活動を行っていた 1800 年前後の時代に対する危機意識を浮き彫りにし、危機的状况においてこそロマン主義者たちが見いだそうとした希望の原理を、当時の国家情勢を交えて明確に示した。具体的には、主に『信仰と愛』において、プロイセン王と王妃の象徴性に注目し、王と王妃の愛が、理想の国家そのものではなく、理想の国家を象徴し、予感させるものであること、理想の国家を単なる理念としてではなく、感覚的に認識可能にするため、ノヴァーリスが実在の国王夫妻に象徴的役割を担わせたことを明らかにした。

また平成 23 年 8 月にはドイツのマールバハ文学資料館およびオーバーヴィーダーシュテットの初期ロマン派研究所において資料収集を行い、最新の研究文献や新しく発見された一次文献を入手することができた。

平成 24 年度は、フリードリヒ・シュレーゲル『ルツィンデ』の分析を行い、日本ヘルダー学会研究発表において、同作品が啓蒙主義的感覚論の影響を受けつつも、そこにロマン主義文学特有の官能性を付与することで独自の文学世界を形成する作品であることを示した。さらに発表原稿に加筆、修正を施し、慶應義塾大学独文研究室の紀要論文に投稿した。

さらにロマン主義と多文化共生思想に関して宇都宮大学で講演を行い、ノヴァーリス、クライスト、アルニムの作品を通し、ロマン主義者たちが啓蒙主義的進歩思想に基づいた楽観的な多文化共生思想を批判しつつ、独自の共生思想を築いていく過程を示した。具体的には、ノヴァーリスが十字軍遠征をヨーロッパの視点と中東の視点から描き、両方の立場を批判している点、クライストが白人による植民地支配を批判しつつも、ハイチ革命時の黒人による蜂起を正当化していない点、アルニムがジプシーとヨーロッパ人の安易な和解を避ける結末を用意している点に注目し、ロマン主義者たちが啓蒙主義的な多文化共生思想を批判・検証している過程を明らかにした。

平成 25 年度は主にクレメンス・ブレンターノの長編小説『ゴドヴィ』の研究に従事した。目的は、同作品を初期ロマン主義から後期ロマン主義への移行期の作品と位置づけ、初期と後期のロマン主義の相違を明らかにし、包括的ロマン主義研究の礎を築くことである。研究の結果、初期ロマン主義者たちが提唱した超感覚的世界を感覚的に体験可能なたちで描出する試みとしての「感性的宗教」がブレンターノにおいては「官能の狂気」として継承されている点、および初期ロマン

派の「絶対的なもの」への無限の憧れがブレンターノにおいては「無」への回帰への憧れに変わっている点が明らかになった。

平成 26 年度は、ノヴァーリスからブレンターノを経てクライストに至る「新しい神話」概念の変遷を啓蒙主義的感覚論および啓蒙主義的歴史観の文脈から明らかにする研究を行った。これはいわば当該研究課題の集大成ともいえる研究成果である。4 年間にわたり、研究計画に掲げたノヴァーリス『信仰と愛』、『ヨーロッパ』、『ハインリヒ・フォン・オプターディングゲン』、『フリードリヒ・シュレーゲル』、『ルツィンデ』、『クレメンス・ブレンターノ』、『ゴドヴィ』およびハインリヒ・フォン・クライスト『マリオネット劇場』の研究を遂行し、ドイツ・ロマン主義運動が単なる啓蒙主義へのアンチテーゼではなく、啓蒙主義的諸学問を取り込んで発展して行く運動であることが確認された。

当該研究はドイツ・ロマン主義の包括的研究の礎として、初期ロマン派および後期ロマン派を啓蒙主義受容の観点から捉える試みである。啓蒙主義に端を発する近代自然科学、進歩思想に基づいた歴史哲学、そして知の対象が神から人間へと変わる過程で重要度を増していった身体論、感覚論が初期、後期を通じてロマン主義において有機的に受け継がれ、発展してゆく流れを浮き彫りにできた点は当研究の大きな成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

高橋優：ノヴァーリス『信仰と愛』における詩的国家、宇都宮大学外国文学研究 61 号、査読無、2012、39-56。

高橋優：ドイツ・ロマン主義と「多文化共生」、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報 5 号、査読有、2013、199-214。

高橋優：フリードリヒ・シュレーゲル『ルツィンデ』における感覚の問題、慶応義塾大学独文学研究室『研究年報』30 号、査読無、依頼論文、2013、22-31。

高橋優：「狂気の中で感覚の妄想は癒されねばならない」-クレメンス・ブレンターノ『ゴドヴィ』における“Sinn”と“Wahnsinn”について、東北ドイツ文学研究 56 号、査読有、2015、掲載決定。

高橋優：ノヴァーリスの「感性的宗教」-「新しい神話」としての『ハインリヒ・フォン・オフターディングゲン』、日本アイヒェンドルフ協会『あうろ〜ら』33 号、査読有、2015、掲載決定。

〔学会発表〕(計 5 件)

高橋優：ノヴァーリス『信仰と愛』に見られるロマン派の危機意識、ゲーテ自然科学の集い、2012 年 4 月 1 日、慶応義塾大学。

高橋優：ドイツ・ロマン主義と「多文化共生」、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター(招待講演)、2012 年 10 月 30 日、宇都宮大学。

高橋優：フリードリヒ・シュレーゲル『ルツィンデ』における感覚の問題、日本ヘルダー学会研究発表会、2012 年 12 月 16 日、大阪茶屋町アプロースタワー。

高橋優：クレメンス・ブレンターノ『ゴドヴィ』における“Sinn”と“Wahnsinn”について、東北ドイツ文学学会研究発表会、2013 年 11 月 9 日、東北大学。

高橋優：ノヴァーリスの「感性的宗教」-「新しい神話」としての『ハインリヒ・フォン・オフターディングゲン』、日本アイヒェンドルフ協会研究発表会、2014 年 5 月 25 日、麗澤大学。

(1) 研究代表者

高橋 優 (TAKAHASHI YU)

福島大学人間発達文化学類 准教授

研究者番号：40557617

6. 研究組織